BIOHAZARD DEADLINE NEXTSTAGE

髭伯爵

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＢＩＯＨＡＺＡＲＤ　ＤＥＡＤＬＩＮＥ　ＮＥＸＴＳＴＡＧＥ

【Ｎコード】
Ｎ９６３７Ｅ

【作者名】
髭伯爵

【あらすじ】
時は２００２年・・・ラクーンシティ消滅から４年が過ぎていた。未だに終わることの無いアンブレラの悪夢を終わらせるため、ラクーンからの生き残りである平山健は仲間とともにアンブレラを倒すために立ち上がる！！～～～この作品は『ＢＩＯＨＡＺＡＲＤＤＥＡＤＬＩＮＥ』の続編になります。そちらからお読みいただけると嬉しいです。

プロローグ・ＦＩＬＥ１：とある研究所にて（前書き）

いよいよ始まりました！！　書くと言っておきながら数ヶ月放っておきましたが、ようやく書く気になりました！！　更新は遅くなるかもしれませんが、どうか気長にお付き合いください！！！

プロローグ・FILE1：とある研究所にて

ヨーロッパの片田舎。そこにとある工場があった。経営主は世界規模で展開している製薬会社、アンブレラ。
外観だけならば、どこにでもある少し古ぼけた工場だ。だが、ほんの一握りの者は知っている。その地下深くで、とあるウイルスを使った生物兵器が作られていることを。
工場の中に入ると、恐らくは何かの機械を作るためであろう旋盤やベルトコンベアが目に入った。しかし、何故か誰もいない。従業員が休みであろうと、警備の者ぐらいはいるはずなのに、警備員すらいなかった。
工場の裏手を見ると、直径数メートルはあると思われる巨大な穴が地下へと延びていた。
穴の中は整備されており、どうやら巨大なエレベーターの入り口のようだ。
このエレベーターを使うのは、地下の研究所の関係者だけだ。しかし、今日に限っては違っていた。

「撃てぇ！！」

タクティカルベストを着込んだ男の号令とともに、彼の前で膝をついて一列に座っている同じ格好をした者達が前方へと一斉に銃撃を行った。
彼らは、この地下研究所の警備員である。この研究所はアンブレラが極秘で開発している「Tウイルス」と呼ばれるものを研究している。そのためか、時折その研究成果を目当てにした侵入者が現れる

ため、彼等のような荒事を専門とする傭兵が雇われるのだ。事実、彼等は研究所に侵入してきた者を2度ほど撃退している。だからこそ、今回の襲撃も当初は落ち着いて対処しようとしたのだが・・・・。

「やれやれ・・・、随分と手荒い歓迎だな・・・。」

複数の9ミリサブマシンガンによる銃撃が行われる中、銃声の音に紛れてまだ幼さの残る、けれども修羅場を幾度と無く潜り抜けてきた者特有の気迫の篭った声が聞こえてきた。
それと同時に、何かが弾かれるような音が連続でしていた。
やがて、警備員達の銃が弾切れを起こしていき銃撃が止んだ。本来ならばすぐにマガジンの交換を行うべき筈だが、彼等はただ3桁以上の弾丸が使用された銃撃によって舞っている煙の向こうを睨んでいた。その目には僅かながら恐怖が浮かんでいた。
実は、今回の侵入者が入ってきてすぐに別の警備員達が侵入者と交戦していた。その時、侵入者はある武器を使い、警備をなぎ倒したのだ。
その様子を監視カメラで見ていた監視役の人間は自分の目を疑った。何故なら、その時使われた武器とは・・・・。

「ゲホッゲホ・・・・。おい、撃ち過ぎだぞ。煙い・・・・。」

晴れていく煙の向こうから不満げな声を上げて、侵入者は平然と歩いてきた。
見事な金髪にサングラスを掛け、黒革のロングコートと同じ材質と思われるズボンを履き、コートの下にはズボン、コートと同じ材質のベストを着込んでいた。顔立ちは日本人と思われるが、未だ幼さの残る顔立ちだった。
まるでB級映画の主人公のような格好だが、何よりも異彩を放って

いるのは、彼が右手に持っている幅広の両刃の大剣だった。
刃の全長は１m超といったところ。先端近くの刃が左右に突き出しており遠心力によって威力が増す形状をしているその剣は、鍔に髑髏の装飾がされており、見るものに恐怖を与える。
警備員達の目には、まるで散歩でもしているかのように歩いてくる侵入者の後ろに、歪に歪んだ銃弾が大量に床に転がっているのが目に入っている。しかも、左右の壁の近くにだ。
侵入者は警備員から5メートルほどの位置まで来ると、一旦立ち止まり、彼等に声を掛ける。
明らかに剣が届く距離ではない。しかし、警備員達にはある種の確信があった。
この距離では殺られる、と・・・。

「悪いが退いてくれねえか？　余計な死人は出したくねえんだが。」

字面だけならば、プロの傭兵である彼らを舐めているとしかいいようがない。しかし、侵入者からは、抜き身の刃物のような殺気が言葉とともに放たれていた。
修羅場を潜り抜けてきた警備員達が、恐怖を感じてしまうほどのものが。

「ふ、ふざけんじゃねぇぞ！！」

その中で、普段からプライドが高いために仲間内から疎まれていた男がコケにされたと思ったのだろう。弾切れになったサブマシンガンを捨て腰のホルスターからハンドガンを抜こうとする。
が、彼の動きはハンドガンがホルスターから抜けたところで止まる。
いや止められた。
彼の目の前には何をしたのか、既に侵入者が迫っていて右手の大剣を振り上げたまま固まっていたのだ。

やがて、男の体にゆっくりと線が浮き出てくる。その線は人体急所である正中線上、つまりは体の中心に浮かび、段々と血が滲んでいく。
そして、次の瞬間には警備員の体は文字通り真っ二つに切り裂かれて床に崩れ落ちた。
血と内臓がぶちまけられているにも関わらず、侵入者の顔には一切の感情は浮かんではおらず、それが残った警備員達の最後の理性を刈り取っていく。

「う、うわあああーー！！！！」

1人の警備員が悲鳴を上げて逃げ出すと、最早歯止めは効かない。
他の警備員も我先にと逃げ出していく。
それを邪魔するでもなくただ前へと進んでいく侵入者は、不意にコートの内側へ手を入れて、そこから無線機を取り出しどこかへと連絡を入れる。

「こちらブラックナイト。もうそろそろ研究室にたどり着きそうだ。・・・・え、もっと早く？無茶いうな、警備とかの抵抗あんだし、まだB．O．Wが出てきてないからもう少し掛かる。・・・ああ、そっちは任せた。んじゃな。」

この場にいない誰かと侵入者が連絡をし終わった直後、彼の目の前の通路から金切り声のようなものが聞こえてくる。侵入者にとっては、4年ぶりに聞く懐かしい声だった。

「まだこんなもん作ってたのか・・・・。連中も懲りねえなぁ。」

通路の壁が突如開き、そこから緑色の肌を持つゴリラのような生き物が現れる。しかも開かれる壁は一つではなく、いつの間にか10

匹ほどの数が集まっていた。
しかし、侵入者の顔に焦りは全く無い。彼は左手をコートに入れ腰の後ろに回すと、１丁のハンドガンを取り出した。
その銃はＭ９２ＦＳのような形をしているが、銃身を長くするパーツを取り付けてあり、マガジンも２０発弾倉に変えられていた。グリップには何故か漢字で「断罪」と書かれている。
侵入者は目の前の化け物・・・ハンターと呼ばれる生き物を見据えて笑みを浮かべた。

「さてと・・・・それじゃあ、仲良く地獄に逝ってもらおうか！！！」

これから３０分後、この研究所のあった場所で大規模な爆発が上がった。

プロローグ・FILE2：STARS（前書き）

あ～くそ、何か主人公達が全く出てこないな今回・・・。

プロローグ・FILE2：STARS

ドイツ、ベルリン。
とある町のホテルにて、数名の男女が険しい顔つきで話し合っていた。

「カルロス、その話は本当なの？」
「間違いないぜ。俺がわざわざ確認してきたんだからな。間違いなく俺達以外の奴らの襲撃を受けてた。」

部屋のソファに座っているショートカットの女性がカルロスと呼ばれた褐色の肌の青年に確認をとる。青年はテーブルでアサルトライフルの整備をしつつ、ショートカットの女性へ肯定の意を示す。

「でも、一体どこの組織に襲撃されたのかしら。ウチじゃないのは確かなんでしょ？」
「ハイ。そのときはどの部隊も展開してまいませんでしたし、独断で行動した人も確認されてません。」

椅子に座って考え込んでいる、天使が描かれたベストを着込んでいるポニーテールの女性からの問いに、書類らしきものを確認しているバンダナを額に巻いている女性が答える。

「しかし、どこかの国が動いた情報はないぞ。ＨＣＦの連中か？」
「いや、ウェスカーなら俺達に対して何かしらのアクションを取ってくるはずだ。それに、同時に２箇所襲撃されたというのも気になる・・・。」

愛用のコルトパイソンをいじっていた逞しい髭を蓄えた壮年の男性

が、自分達と敵対関係にある組織の名を上げる。しかし、横で大型のナイフの手入れをしている精悍な顔つきの男性がそれを否定する。

「シェリー、あなたはどう思う？」

「・・・なんとも言えない。情報が少なすぎるわ。」

ポニーテールの女性が、先ほどからノートパソコンで何かをしているポニーテールの少女に意見を聞いてみるが、少女の方も芳しい答えを持っていない。

彼等が話しあっているのは、先日同じ日に同時に襲撃された2箇所のアンブレラの研究所についてだ。

彼等の所属する組織の名は＜ＳＴＡＲＳ＞。アンブレラの違法な生物兵器の製造による事件を迅速に解決するために、アンブレラのが研究し、生物兵器を作るために使われていた＜Ｔウイルス＞の漏洩事故により爆撃によって消滅したラクーンシティからの生存者やアンブレラに怨みを持つ人間などが集まって出来た組織だ。

元々は、４年前消滅したラクーンシティに存在した同名の警察機構の特殊部隊員の生き残りが反アンブレラ組織となったのが始まり。

それから志を同じくする人間が集まり、様々な国家からの支援も来るようになっていき今ではそれなりの規模を持つ組織となっている。

彼等の活動はアンブレラのＴウイルスによる実験を止めさせ、それ相応の報いを受けさせることだ。そのため、時にはアンブレラの研究所に襲撃をかけることもある。

しかし、今回の研究所襲撃は彼等が行ったものではなく、誰が行ったのか分からないのだ。

そのため、様々な所から情報を集めたり、こうして主要メンバーを集めて会議をしたりしているのだが、いまだに有力な情報は入ってはおらず、どうにも行き詰っているのだ。

全員が謎の襲撃者に頭を悩ませていると、部屋の扉がノックされる。

即座に部屋の中に緊張が走り、全員が手持ちの武器を構えていつで

も闘えるようにする。

「前にアンブレラの襲撃があったのはいつだったっけ？」

「１ヶ月前。確かＭＰ５Ａ５で武装した傭兵１０人だったはず。」

部屋の奥でＭ４Ａ１を構えているカルロスの呟きに、テーブルに隠れながらハンドガンを構えているシェリーが抑揚のない声で答える。彼等は時にアンブレラから襲撃を食らうこともあるのだ。

「そのときは私とクリスとシェリーとクレアで返り討ちにしたわね。」

「シェリーが素手で２人倒したときは皆驚いてたな。」

ショートカットの女性とナイフを手入れしていた男性が、ハンドガンを構えながらドアに近づく。ドアにはコルトパイソンの入っているショルダーホルスターに手を入れながら、壮年の男性が先行している。

彼はのぞき穴で外を確認すると、外にいるのが仲間だと気づいて銃を仕舞う。

「味方かバリー？」

「ああ。外にいるのはレオンだ。」

「じゃあ早く入れてあげましょうよ。」

ナイフの手入れをしていた男性が警戒を解いているバリーを見て銃を仕舞い、ポニーテールの女性がドアを開けに入り口に向かう。

彼女がドアを開けると、外には金髪の髪を邪魔にならないよう切りそろえている、レオンと呼ばれた青年が入れてもらえるのを待っていた。

「待たせてごめんなさいレオン。」
「別にいいさ。それよりもクレア、早く入れて欲しいんだが・・・。」
レオンからの催促に、クレアは慌てて横にずれてレオンを部屋に入れる。
レオンが中に入ると全員の緊張が解け、構えていた銃を下ろしたり片付けたりしていく。
「レオン、お帰り。」
「ただいまシェリー。」
ハンドガンを仕舞いながら言ってくるシェリーに笑顔で返しながら、レオンは部屋の椅子に座り込む。
「レオン、何か情報あったか？」
M４A１の整備を再開しているカルロスが顔だけをレオンに向けながら話しかける。
レオンは２箇所同時の研究所襲撃について独自に調べを進めていたのだ。
「ああ、面白い情報を見つけてきたぞ。」
「面白い情報？」
ショートカットの女性が怪訝そうな表情で呟く。
「まず、襲撃された２つの研究所の内、ポーランドの研究所には６人ほどの武装集団に襲撃されてる。」
「それだけの人数で壊滅させたのか・・・・。」

「かなり慣れてる連中みたいね。兄さん、どう思う？」
「・・・軍の特殊部隊辺りならそれくらいできるだろうが、どこの国も動きを見せていないしな・・・。」
クリスと呼ばれた男性は妹であるクレアからの問いに顎に手を当てながら考え込むが、やはり答えは出てこないようだ。
すると、レオンが表情を険しくさせながら続きを話す。
「・・・問題はもう一つの研究所だ。こっちはたった一人に潰されたらしい。」
「たった一人だと！？」
バリーが驚きの声を上げる。彼等は全員アンブレラ社の研究所に幾度と無く攻撃を仕掛けている。その度に、アンブレラが作り上げた生物兵器――――――B．O．W（バイオ・オーガニック・ウェポンの略）――――――との戦闘も必然的に行われる。
B．O．Wはかなりの強敵であるため、たとえ軍隊でも何の知識も無しに闘えば寝首をかかれかねない存在なのだ。
にもかかわらず、侵入者は単独で研究所を壊滅させたというのだ。熟練の戦闘経験を持つ彼等からすればにわかに信じられない話だ。
「ガセではないの？」
「ＣＩＡからの情報筋を頼りに、生き残りの警備員と研究者数名に聞いてみたんだが、全員が同じ事を言っていたよ。『大剣を携えた日本人らしき侵入者が、全て切り裂いていった。』とな。」
「・・・普通剣なんかでハンターと倒せるわけないじゃない。ジャパンのアニメじゃないんだし。」
「けど、それしか情報がないのなら、信じるしかないと思う・・・。」

クレアが余りにも非現実的なレオンの話に頭を振るが、シェリーの言葉に黙り込む。

「やれやれ・・・・。情報が来ても大して変わらんな。」

「結局襲撃した連中について有力な手がかりはなしか・・・・。ジル、あさっての強制捜査は日を改まった方がいいか？」

実は、１週間ほど前からＳＴＡＲＳはオーストリアにアンブレラの研究所があることを突き止め、そこへ捜査をすることを計画していたのだ。

「・・・正体が分からない以上、下手に警戒するのもどうかしら。」

「そうだぜ。もし敵だってんなら、返り討ちにすりゃいいだけだ。」

ジルの毅然とした答えにカルロスが整備の完了したＭ４Ａ１の動作確認をしつつ答える。

「カルロスの言う通りだ。相手が誰であれ、我々は立ち向かうだけだ。」

「その通りだ。」

「いちいち気にしててもしょうがないしね。」

「当たって砕けろ。」

「シェリーそれダメだろ・・・・。」

こうして、彼等は2日後の研究所捜査に向かうこととなる。

彼等は知らない。その日こそ、正体不明の襲撃者達と出会う日であるということを・・・・。

その頃、ＳＴＡＲＳメンバーが警戒している正体不明の人物達は、次の襲撃場所の選考をしていた。

「さて・・・・次はどこを攻める？」
「そろそろデカイとこいった方がいいんじゃねえか？　いい加減雑魚の相手は飽きてるよ。」
「そんなこと言って、レイン実は健と一緒に居たいだけなんじゃ・・・・。」
「な、そんなわけないだろ！！」
「だが、確かにそろそろ頃合だろうな。」
「・・・私達も、大分奴らと闘りあえるようになったし。」
「けどよ、確か俺らのほかにもアンブレラに敵対してる奴らと鉢合わせにならねえか？」
「ダンの意見にも一理あるが、ここはあえて危ない橋を渡るべきだろうな。」
「んじゃ、次の場所は・・・・ここだな。」
「オーストリアか・・・・。確か、ここはかなり重要な施設と言う情報が入っていたな。」
「んなこと、アタシらには関係ねえだろ。」
「アンブレラをぶっ潰す！　そんだけだよな！！」
「ダン単純・・・・。」
「はいはい、そろそろ雑談止めろよ。明日の準備しなきゃなんねーしな。」

こうして運命の時は迫っていく・・・。

プロローグ・ＦＩＬＥ３：突入！（前書き）

うわ～・・・。随分と更新の間が開いてるよ・・・・。

プロローグ・FILE3：突入！

ドイツ国内において最大の標高を誇る、ツークシュピッツェ山。オーストリアとの国境にあるこの山には、登山客を対象にするロッジや、国境の検問所などが存在し、北麓にあるガルミッシュ＝パルテンキルヒェンと呼ばれる都市からは鉄道まで通っている。

観光や登山、国境越え以外ではまず人が近寄ることの無いこの山には、国境警備の関係者でもそれなりの権限を持つ一部しか存在を知らない建物が存在する。

建物を建設したのは多国籍企業であるアンブレラであり、この建物はとある研究施設として使用されている。国境警備の任に就いている連邦警察局は、一企業でしかないアンブレラの建設したこの建物には一切干渉はしない。

その理由は簡単である。連邦警察局の上層部である政府からの直接の指示で、その建物には一切干渉しないことになっているのだ。

無論、そのことを不審に感じた職員は存在したが、そのほとんどが視察などの名目で研究所へと連れて行かれ、誰一人として戻ってくることが無かったのだ。そのため、ここツークシュピッツェ山の地区管轄部隊では、アンブレラの研究所についての話はタブーとなっていた。

そして今日。2時間ほど前からすっかり暗くなっているこの山の上空には、数機の軍用ヘリがローター音を響かせて飛行していた。

普段は滅多にヘリが飛行することの無いこの山に、乱雑な音を撒き散らすヘリ。このヘリが向かっているのは、国境からかなり離れた山間部にある、アンブレラの研究所である。

国籍不明のこのヘリに乗っているのは、銃火器で武装している幾人もの男女に、連邦警察局の人間が数名である。彼等は国境近くにある研究所に向かう際、きちんと政府から許可を受けていることを示すために同行している。

連邦警察局の者以外でヘリに乗っている者は全員着ているタクティカルベストの背中に3つの星マークと『S・T・A・R・S』の文字が書かれている。
彼等が所属する組織の名は『S・T・A・R・S（スターズ）』。アンブレラが開発した生物兵器を開発するウイルス、『Tウイルス』による災害を食い止め、アンブレラを倒すために、かつてアンブレラのTウイルス漏出により、人間がゾンビへと変貌する未曾有のバイオハザードが発生し、最終的にはミサイルによる爆撃で地図上から葬られた街に実在した警察の特殊部隊から作られた組織である。
今回の任務は、ツークシュピッツェ山にあるアンブレラの研究所への強制査察である。もっとも、あくまでSTARSは警察組織なので査察という言葉を使っているが、彼等の装備だけを見れば『査察』というよりは『強襲』あるいは『作戦』と言っても差し支えないだろう。

「ギャハハハ！！！　それじゃ何かケビン！　お前また遅刻したってのか！！」
「るっせぇ！　俺だって好きで遅刻してるわけじゃねえんだよ！！」

ヘリのハッチ近くで談笑しているのは、不機嫌そうにしている無精ひげを生やしている男性と、無精ひげの男性の話が面白かったのか腹を抱えてヘリ内に響くほどの大爆笑をしている恐らくはラテン系と思われる青年は、互いにM4A1ライフルにM203グレネードランチャーを装着しており、他のSTARSのメンバーも似たような装備をしている。警察組織に所属しているとは思えない。どこかの軍隊かと思うほどだ。しかし、これが彼らにとっていつものことなのだ。
無精ひげを生やしている男性の名はケビン・ライマン。かつてラクーンシティの警察に所属し、漏洩してしまったTウイルスの影響により死者の都と化した街から仲間と共に脱出した経験を持つ。そ

の後、元同僚で現ＳＴＡＲＳのリーダーであるクリス・レッドフィールドからの頼みによりＳＴＡＲＳへ入隊。持ち前の身体能力と射撃技術によりＳＴＡＲＳ内でも指折りの実力を持つ。
ラテン系の青年の名はカルロス・オリヴェイラ。南米でゲリラとして活動していた前歴を持つ腕利きの傭兵で、アンブレラの子飼いの部隊であるＵＢＣＳ（アンブレラ・バイオハザード・対策部隊の略）に所属していた。
４年前のラクーンシティでのバイオハザードにおいては、所属する部隊がゾンビにより壊滅に追いやられつつも生き残り、後に街で同じく生き残っていた特殊部隊ＳＴＡＲＳの隊員であるジル・バレンタインと出会う。以後、互いに生き残るために協力し合い、街から脱出することに成功する。
ラクーンシティからの脱出後は、一緒に脱出したジル・バレンタインとともに反アンブレラ組織へ身を投じ、以後現在に至るまでアンブレラと闘い続けている。
根っからの楽天家だが細かいことにはこだわらない性格のケビンと、お調子者だが情に厚いカルロス。この２人はやたらと気が合うらしく、非番の日でも行動を共にしていたりする。
以前から遅刻癖のあるケビンは、目に涙を浮かべるほど笑っているカルロスをさも気を悪くしたというように渋い顔つきをする。

「カルロス。そんな笑うことはないだろ。」
「ククク・・・・。だってお前・・・、遅刻したの彼女とのデートなんだろ？そんでお前が遅刻したことにキレて・・・・い、一ヶ月デート禁止とか、笑わねえ方がおかしいぜ！！」
「しゃーねぇだろ・・・・。彼女キレるとマジで恐えから逆らえねんだよ・・・。」

・・・・将来ケビンは女房の尻に敷かれる可能性が高いようだ・・・。

未だに笑い続けているカルロスに、どんどん不機嫌になっていくケビンが、警官時代から愛用している４５口径ハンドガン・コルト４５オートで黙らせるべきか真剣に悩んでいると、ヘリの操縦席から声が放たれる。

「カルロス、いい加減にせんか。あと2分で目的地に到着だぞ。」

ヘリの操縦席からカルロスを諌めたのは、ＳＴＡＲＳのベストを着込んだ壮年の男性だ。恐らくは３０代後半と思われる男性は、年齢による衰えを感じさせないほど体格ががっしりとしている。その豊かな髭を震わせて、今度は機内にいるＳＴＡＲＳメンバー全員へと話しかけていく。

「他の皆も聞こえたか？　じきに到着だ。武器の点検をしておけ。」

『了解！』

壮年の男性の名はバリー・バートン。ラクーンシティの頃よりＳＴＡＲＳに所属する最古参の人間の1人だ。ＳＴＡＲＳ内においてケビンを上回る射撃の腕を誇り、チーム内での信頼も厚い人物でもある。

バリーから言われて、機内のＳＴＡＲＳメンバーは一斉に手持ちの銃器にマガジンを差し込み、動作確認をしていつでも戦闘に入れるよう準備している。

たった今まで騒いでいたカルロスとケビンも黙り込み、カルロスはベストのポーチにハンドグレネード（いわゆる手榴弾のこと）を仕舞って行き、ケビンは切り札としてもって行くことにしている、筒状の使い捨て武器、Ｍ７２ＬＡＷ個人携帯対戦車ロケットを3本背中に背負っている。

やがて機内に乗っている連邦警察局以外の人間が準備を終えると、機内はヘリのローター音以外何も聞こえなくなり、無言のまま緊張

感だけが高まっていく。
操縦席のバリーは、ヘリのコントロールに集中することで気を落ち着けていたが、やがて窓から山肌にそびえ立つ研究所を視認すると、何度修羅場を潜り抜けても慣れることのできない高揚感のようなものが体から発散されているのを自覚する。

「見えてきたぞ！　総員降下準備！！　まずはカルロスとケビンからだ！！」
「了解！　俺の華麗な降下を見せてやるぜ！！」
「ケビン！この前みたいな逆さ降りだったらてめえを真っ先に撃つぞ！！」
「・・・・。」
「図星かよ！！」
「バカ言ってる暇があったら準備をせんか！　あと２０秒で突入だぞ！！」

気合を入れて降下用ロープをタクティカルベストの金具にはめているケビンに、前回降下作戦を行ったときのことを思い出したカルロスが、２度目は流石にないと思いつつ冗談を言ってケビンを凍らせている。バリーはそれをにやけ顔で見つつ、時間が無いことを知らせておく。

「おっと。それじゃ、そろそろ降りるか。」
「あちらさんを待たせるわけにはいかねぇしな。」
「全くだ。」

軽口を叩き合いつつ、ハッチを開けて降下準備を完了させる２人。その後ろには、他のＳＴＡＲＳメンバーが強い意志を秘めた瞳を２人へ向けている。その中に、２人だけ不安を目に浮かべている者が存在した。元傭兵の男と、まだ成人して数年と思われる青年の２人

は、今回が初任務の新人なのだ。
　カルロスとケビンはそれぞれ不適な笑みを浮かべて、隊員たちを激励する。

「さーて、そんじゃ遠足としゃれこむぜ。気ぃ引き締めろ！」
「連中に泡吹かせてみせっぞ！！」
『了解！！』
「こちらアルファ部隊。これより降下する。チンタラするなよルーキー！」
『り、了解！』

　後続のヘリへと連絡を入れているバリーから声をかけられ、新人２人はやや緊張気味の返事を返す。それを聞いて、バリーは自分が若かった頃でも思い出したのか苦笑している。
　ヘリが降下地点である研究所のヘリポートに到着すると、ハッチからカルロスとケビンが身を乗り出し、すぐに降りられるようにする。研究所からは警備兵と思われる人影が現れ始め、降下と同時に銃撃戦となりそうだ。
　そのような状況であっても、２人は笑みを浮かべている。まるで、この程度の困難など簡単に超えられると確信しているかのように。

「行くぜ！！　オラァーーー！！！！」
「イエーーーーーー！！！！！！」

　ケビンは降下する直前にＭ４Ａ１のセレクターレバーを「セーフティ」から「フルオート」に変え、降下と同時に建物から出てきている警備兵たちに銃撃を浴びせていく。
　ケビンが的確な射撃でヘリに銃撃を加えようとした警備兵を打ち抜いていく間に、カルロスは手榴弾を一本取り出すと、建物の入り口へと思い切り投げ込む。２人が降下し終えると同時に、手榴弾の

爆発が起こる。
空は宵闇。硝煙の舞うヘリポートに次々とＳＴＡＲＳの隊員が降り立っていき、ＳＴＡＲＳは研究所へと侵入を果たした。

ＳＴＡＲＳの先行隊であるカルロス達アルファチームが研究所へと降り立ったのと同時刻。研究所の立てられている場所からかなり離れた場所から、１人の人間がその光景を見ていた。

「アレ、どっかの組織に先越されたか？」

闇夜でも目立つ見事な金髪に、サングラスと黒皮のロングコート。ズボン・ブーツにいたるまで黒一色で染められており、左右の腰には２丁のデザートイーグル５０ＡＥがホルスターに納められている。
こんな山の中にどう見てもいるはずのない格好をしているその人物は、目的の場所から銃声などが聞こえていることに気づき、少し不思議そうに首を傾げる。

「・・・まぁいいか。取りあえず、ダンとノル見つけないとな。確か、あいつらはもう入り込んでるんだよな・・・。」

やがて、考えるのがめんどくなったのかどうでもよくなったのか、時折爆発音の混じる銃声を無視して研究所へと向かうことにしたようだ。

声からして未だに成人を迎えていない青年と思われる彼は、その場でしゃがみこむと、まるでクラウチングスタートのように両手を地面につけた格好をする。

「はぁぁぁぁぁ・・・・・・・・・・、フン！！！」

地面に手をついたまま、彼は気合の入っている呼気を吐いて、自分の体内から何かしらの力を引き出すかのように体に力を込める。すると、彼の背中から、コートを着込んでいるにも関わらず、まるで悪魔が生やすような、全長４メートルはあろうかという漆黒の翼を出現させる。翼の下には左右それぞれ４つの穴があり、そこからジェット機のエンジンのような火が漏れている。

そのあまりにも非現実的な光景を、天空に僅かに出ている月の光が何か別の次元の物と錯覚させる。見るものに絶望を与える、絶対的な存在へと。

現実に現れた『悪魔』のような青年は、翼を準備運動なのか軽く振るうと、翼の下にある穴から猛烈なジェット噴射を噴出し上空へと上がっていく。

研究所へもう一機ヘリが到着しているのを確認すると、青年は笑みを浮かべる。

「今回は随分と騒がしいパーティーになりそうだな！」

青年は腰からデザートイーグルを抜くと、飛行機雲を残しつつ猛スピードで研究所へと飛んでいく。その顔には、獰猛な笑みが浮かんでいる。

「ちいとばかし遅くなっちまったが、せいぜい暴れてやるぜ！！！！　アンブレラ！！！！！！！」

こうして、正義を貫く星と、人を捨てて仲間を守った修羅が同じ場所へと集う。果たして、両者の邂逅は何を起こすのか・・・・・。

プロローグ・ＦＩＬＥ３：突入！（後書き）

今回のあとがきはバイオハザードというゲームを知らない読者のためにバイオハザードの用語をいくつか紹介してきます。

アンブレラ。

１９６８年に製薬会社として創始者であるオズウェル・Ｅ・スペンサーによって設立された巨大多国籍企業。社名の由来は「人々の健康を庇護する」という社訓からきているが、実際には秘密裏に生物兵器の開発に携わっている。

裏で大国と太いパイプを持っており、例え世界最大の国であろうと迂闊に手が出せない。

Ｔウイルス。

アンブレラ社が独自に開発したバイオモンスター製造ウイルス。アンブレラの裏の事業において、重要な鍵となっている。

人間が感染した場合、細胞が徐々に変質していき、初期は下痢や嘔吐、全身のかゆみを覚え、最終的には意識の混濁や知能の低下の後死亡する。

その後、一定時間後に復活するが、記憶はおろかまともな思考能力すら消失しており、まさしくリビングデッドのようになってしまう。唯一残しているのは『空腹』のみで、生きた人間などに襲い掛かり捕食しようとする。

こうなると最早脳を破壊して完全にしてしまう以外の対処法はない。

元来感染力が強く伝染性の高いウイルスのため、少量の流出が大惨事を招きかねない。

Ｔは英語で暴君の意味の「ＴＹＲＡＮＴ（タイラント）」より。

ラクーンシティ。
アメリカ中西部の小さな観光都市。元はそれほど大きい街ではなかったが、アンブレラが街の中心工業になって以来めざましい発展をとげる。
１９９８年にアンブレラのＴウイルスが街に流出。ゾンビの巣窟となり、１０月２日にミサイルにより消滅する。

今回はこんなもんです。次回のあとがきも用語紹介をします。
ご意見・ご感想待ってます！！

プロローグ・ＦＩＬＥ４：アンノウン（正体不明）（前書き）

間が随分と空いたなー。
これからも多分こんなペースで更新してくと思いますが、どうか温かい目で見てやってください。

プロローグ・FILE4：アンノウン（正体不明）

ツークシュピッツェ山、アンブレラ研究所。

無機質な白で彩られている研究所内。いつもならば、研究員が移動するときの足音ぐらいしか響かないこの場所で、今日という日は違っていた。

様々な種類の銃声に、悲鳴や怒号・・・・・・・。

本来静寂に包まれる筈の研究所は、戦闘音に満ちており、あたかもこの場所で行われていた悪魔の所業の罰とでも言うようだった。

研究所一階、ヘリポートからの入り口から奥へと進んでいるケビン・カルロス率いるアルファ部隊5名は、現在警備隊と銃撃戦を繰り広げている真っ最中だ。

「おいカルロス！！」

「何だぁ！？」

手頃な扉をバリケードにして身を隠しつつ、M4を警備隊へと撃ち込みながら、ケビンは反対側のドアで同じように身を隠しつつ、口で手榴弾のピンを引き抜いて警備隊が身を潜めている通路の曲がり角へ投げ込もうとする。

「シンディに詫び入れるの手伝ってくれねーか！？」

凄まじくこの場に似合わない内容だったため、カルロスは思わず体勢を崩し、扉から顔がはみ出て危うく警備隊から放たれた弾丸によって違う世界に飛び立ちそうに。

「のわぁぁ！！！」

「危なーー！！！？？」

咄嗟に、カルロスがバリケードにしている扉にいた新人隊員２人がカルロスを室内へと引っ張り込んだお陰で、彼は自分の脳味噌を見ることを免れる。きちんと手榴弾を離さなかったのはある意味凄いが。

「ふい～～・・・。すまん助かった！！」
「いいってとこよ！！」
「礼はいいからから撃ち返してくれ！！」

茶色がかった短髪に軽そうな印象の隊員が外面の印象そのままの返事を返し、もう１人の切れ目に額の傷のある新人隊員が、ＡＧ３６グレネードランチャー付きＧ３６Ｃを廊下の向こうの警備隊へと撃ちながら叫ぶ。Ｇ３６Ｃから放たれた５．５６ｍｍＮＡＴＯ弾は、警備隊の隊員数名の腹部や頭部へと的確に吸い込まれていく。

弾丸はそれぞれ増幅された運動エネルギーによって着弾時から警備隊員の肉や内臓をずたずたに引き裂き、体外へと放出されていく。あとには、致命傷を受けて床に転がる警備隊員が残るだけだ。

仲間がああもあっさりと殺されて勢いが僅かに衰えたところにケビンのＭ４に取り付けられたＭ２０３グレネードから４０ｍｍグレネード弾が発射され、曲がり角の壁へと飛来し、その周辺にいた警備隊員たちに爆風が叩きつけられる。

カルロスは扉に張り付いてＭ４のマガジンを入れ替えながら、ふざけたことを言って危うく頭に風穴を開けられそうになる原因を作ってくれたケビンに噛み付く。

「ケビン！！　今言うことじゃねーだろそれ！！」
「いやー咄嗟に思いついたんでつい・・・。」
「ついで済ますな！！　こっちは危うく死ぬとこだったんだぞ！！

！」
「大の大人が細けえこと気にしてんじゃねーって。」
「こっちの命掛かってるから気にするわ！！！」

カルロスがケビンへ怒声を浴びせながら手榴弾を放り投げる。少しの間と警備隊のものらしき慌てた声が聞こえると、通路の向こうから手榴弾の爆発炎が爆音とともに伸びてくる。それが止むのを合図に、カルロスとケビンは扉から身を放して、Ｍ４を構えつつ先へ進んでいく。他の隊員も、彼等の後ろにぴったりと張り付きながら、廊下の向こうにいた警備隊の連中が全滅しているのを確認して先へと歩を進めていく。

「（ひそひそ・・・・。）」
「（ひそひそ・・・・。）」

後ろで殿を務めている隊員たちがケビンとカルロスを見ながら何かを小声で話していたが、カルロスは聞こえないフリをする。どうせケビンと組んでいる間はいつものことだからだ。

「（帰ったら全員訓練メニューキツくしといてやる・・・。）」

隊長という割にはせこい仕返しを考えながら。

「しっかし研究所って広いっすね～。」

所内の真っ白な床を駆け抜けつつ、先ほど世にも恥ずかしい死に方でこの世を去る寸前だったカルロスを助けた茶色短髪の青年が呆れたように呟く。彼の着ているタクティカルベストの胸にはＳＴＡＲＳのメンバーであることを教えるタグが付けられており、そこには隊員番号とともに＜ダン・ホースト＞という名前が書かれていた。

実際、ダンの言う通り研究所内は驚くほどに広く、事前に所内の地図を手に入れることができなかった彼等ＳＴＡＲＳは研究所内の全ての部屋を探し回る羽目になっているのだ。しかも、それでも大したものは得られなかった。

研究員のものと思われるポルノ雑誌をケビンが見つけてしまい、別働隊のブラボーチームの副隊長をしている女性、クレア・レッドフィールドに怒られていた程度だ。

その所為で怒られたケビンは隊の後ろで不貞腐れている。自業自得だと、誰もが思っているが口にしない。余計なとばっちりを受けようと思っている者は流石にいないからだ。

「連中の研究所なんて大概こんなモンだぞ。南極にまでアンブレラの研究所があったからな。」

「マジすか！？」

『マジよ。私が行ったんだから。』

地球上で最南端の場所にまでアンブレラの施設があることを知り思わず大声で叫んでしまう。こっそり聞いていたのか、無線機からは先ほどケビンにキツイ言葉を吐き続けていたクレアが応答し、カルロスの話を肯定する。

「アンブレラを潰していけば、世界一周ができるんじゃねえか？」

「笑えませんよそれ・・・。」

ようやく復活したケビンの軽口に、先ほどダンと協力してカルロスを助けた切れ目の青年が疲れたように呟く。彼のタクティカルベストにもタグが付けられており、隊員番号とともに「ノル・エンディ」の名が書かれていた。

「いいじゃんかよノル。ぶっちゃけ経費で世界一周できるんだぜ？」
「ロクに観光もできない上に、最悪歴史的建造物を巻き添えで破壊してしまう可能性があるのにか？」
「・・・え～っと。」

ダンが話しに乗ってこないノルにここで反論できないのはアンブレラの権力が想像以上にでかいからか、今まで人間としての常識をことごとく破壊してきた友人が全部破壊してしまうのではないかという予感があるからなのか、ダンには区別することができなかった。

「ぶえっくしょい！！！」

その頃、歴史的価値のある代物を破壊する危険があると噂されたその友人は盛大なくしゃみをしていたとかなんとか。

カルロス率いるアルファチームが所内に侵入を果たして既に３０分。研究所に入って３回目の階段下りをするころには警備隊との交戦も少なくなり、だが逆にカルロスたちの警戒心は右肩上がりで上昇している。

「・・・いなくなってやがるな。」
「ああ・・・。レオン、そっちはどうだ？」
『こっちも同じだな。恐らく読み通りの展開が待っているはずだ。』

カルロスは険しい顔をしながら周囲に目を配っているケビンの言葉に相槌を打つと、無線機ですぐ上の階にいるブラボーチームの隊長であるレオン・S・ケネディにも確認を取る。どうやらブラボーチームも同じことに気づいてるようだ。

警備・研究員全てを含めた研究所内で出会う人間の数が、最初の頃よりも確実に少なくなっているのだ。しかも、戦闘に参加しない研究員や作業員はともかく、侵入者であるカルロスたちに向かわなければならない筈の警備隊の連中ですら見かけないのだ。これは異常である。

「・・・この先は警備隊が必要ないエリアっつーことか。」
「だろうな。でなければこの階で誰かに会っているはずだが、この階に入ってから1人としてここの人間と出会っていない。」

殿(しんがり)を務めるダンが、同じく殿を務めているノルと神妙な顔つきで話し合っている。他の隊員たちもつねに四方に気を配りながら通路を移動しており、皆一瞬たりとも気を抜かないようにしている。

彼等がここまで警戒している理由・・・それは、この施設で研究されているTウイルスの軍事利用により作られた【生物兵器】を警戒しているのだ。

そして、アルファチームのメンバーが階段を下りて次の階へと到着すると、研究所内全体に警報が鳴り響いた。

【WARNING。WARNING。研究所内第7層まで侵入されました。これより侵入者へハンターを投入します。職員はすぐに各

階層の避難室へ繰り返します・・・・・。】

「ハッ。　いよいよ主賓のご登場ってわけか？」

ケビンは気合充分でそう答えると、にやりと口の端を上げて笑みを浮かべ先に進もうとする。だが、隣に居たカルロスが止める。

「・・・待て。何かおかしいぞ。」

「？　おかしいって何がだ？」

カルロスに止められ、頭上に疑問符を浮かべるケビン。

「ちょっと待ってください。確か俺らってまだ3階層ほどしか下りてませんよね？」

「さっき下りた階段の近くに【第４階層】って書いてあったからそうじゃねえの？」

「ホントかダン？」

「マジだって。ってか何でそんな念入りに聞いて来るんだよ。」

一旦足を止めたノルが現在の階層を訪ねると、一番最後に階段を下りていたダンが確認していたようで、アルファチームが現在第４階層にいることが判明する。

それを聞いて、ノルはあることに気づく。

「・・・・この放送、【第7階層】に侵入されているから鳴っているんですよね？」

『・・・あ！』

ノルの一言に、カルロスたちが違和感の正体に気づく。

そうなのだ。カルロスたちが現在探索しているのは第４階層。な

のに、放送はさらに下の階層である第7階層に侵入者がいることを告げている。
別働隊のブラボーチームは上の階層である第3階層に居る筈なので、未だ足を踏み入れていない階層に侵入者がいるのはどう考えてもおかしいのだ。
つまり、この先には自分達の知らない別の侵入者がいるということになる。

「俺達より先に侵入してた奴らがいたってことか・・・。」
「いや、多分ＳＴＡＲＳ（ウチ）の襲撃に合わせて侵入したんだろう。先に侵入してたんなら俺達はここの警備隊じゃなくそいつらと闘り合ってたはずだ。」
「だとしたら何で俺らが気づかなかったんだ？　それに、向こうはなんで俺らを無視して先に行ってやがるんだ？」
「分からねえ・・・。」

ケビンとカルロスが目的・正体が全く分からない謎の侵入者に疑問符を浮かべている間、ダンとノルは最後尾で他の仲間に聞こえないよう声を潜めながら話し合っていた。

「（・・・なぁ、先に進んでる正体不明の侵入者って・・・。）」
「（十中八・九アイツだろう。寧ろ今まで何故バレなかったのか不思議だ。）」
「（確かに。隠密機動（スニーキング）とかが世界一似合わねえからな。）」
「（破壊工作は似合うがな。）」
「（いや寧ろテロじゃねーか？）」

どうやら謎の侵入者に心当たりがあるようだ。２人して若干顔色を悪くしながらヒソヒソと、なにやら物騒な話をしている。というか、友人はテロリストなのだろうか。

どう聞いてもそれ以外には考えられないような内容なのだが。

「おい、何話してんだ？」
「いや、何でも無いっす。」
「先ほどの放送で言っていたハンターってのが気になってただけです。」

カルロスが後ろで話し込んでいる2人に気づき声をかけるが、2人は違う話題を出して半紙を逸らす。何故か友人について知られるのを避けているようだ。
カルロスもまさか2人が謎の侵入者の正体を知っているとは流石に知る由も無いため、2人が口にした＜ハンター＞について話していく。

「？　何だ、ブリーフィングちゃんと聞いてなかったのか？」
「一応B．O．Wについての講習は聞きました。けど、そんな簡単に信じれませんよ。あんなB級ホラーのバケモンが出てくるなんて・・・。」
「あー分かるぜソレ。俺もラクーンで始めて見た時目を疑ったからなぁ・・・。」

ノルの疑念たっぷりの言葉にケビンがしみじみと頷きながら同意する。ケビンは4年前Tウイルス流出により壊滅した＜ラクーンシティ＞からの数少ない生存者だ。
彼は街を脱出するとき偶然辿り着いたアンブレラの研究所にて＜ハンター＞と交戦した経験があり、実際に撃破していたりする。

「・・・あんなバケモンが、実は人間をベースにして作られてたって知ったときはマジでびびったっけ。」
「・・・アンブレラってホントに腐ってやがるな。」

ケビンがほんの少しだけ悲しそうに目を伏せると、ダンがアンブレラの非人道的な所業に怒りを覚え、声を震わせている。
ダンだけではない。他の隊員も同じ気持ちらしく、ある者は怒りに満ちた目で、ある者は悲しみを帯びた目で、ある者は決意に満ちた目で、それぞれこの場に集っている。
カルロスは苦笑を浮かべつつ、ダンの傍へ近寄ると彼の肩に手を置いた。

「・・・だから、俺達がこうして頑張ってんだろうが。」
「・・・ですね。」
「おし、それじゃ先に進むぞ！　気を引き締めとけ！！！」
『了解！！！』

カルロスの号令に全員が声を揃えて返事をし、放送が鳴り響いてから立ち止まっていたアルファチームはここでようやく再び移動を再開する。
そのとき、突然カルロスの無線に通信が入る。

『ザ・・・カルロ・・・・・聞こえ・・・・か・・・・！』
「！？　レオンか！？　何かあったか！？」

声を聞いてすぐにレオンだと気づいたカルロスが叫び返すが、無線が故障しているのかレオンからは一方的な言葉しか返ってこない。

『ザザ・・・・ここ・・・・ハン・・・・・ザ・・・ネメシスが・・・・！！』
「おいレオンどうした！？　くそ、ノイズが酷くてよく聞こえねえ！！」
「レオン！！　クレア！！！　シェリー！！・・・・・畜生！駄

目だ、繋がらねえぞ！」
「こっちも駄目です！！」
「俺もです！！！」

カルロスの慌てぶりから何かあったことを察したケビンたちアルファチームのメンバーはそれぞれでレオンとクレア、それからブラボーチーム女性隊員のシェリー・バーキンなどに無線で呼びかけるが、誰一人として応答しない。それどころか、全員の無線にノイズが混ざって使い物にならない状態になっている。

「これはＥＣＭ（妨害電波）　か！？」
「いつの間にかジャミングされていたらしい！　厄介なことをしてくれる！」

無線が使えなくされていることに舌打ちするノル。これではブラボーチームと合流することすら困難になってしまった。

「こちらカルロス！！　レオン返事をしやがれ！！」

どれだけ呼びかけても向こうから一方的にしか返ってこないためイラつき始めたのか、大声で無線へと怒鳴りつけているが、芳しい効果は上げられない。

『ガ・・・ザザ・・・・シェリ・・・・ま・・・あい・・・！』
「レオン！！！」
『ガガガ・・・ザーザー・・・・プツン。』
「！？　くそ、通信が途切れた！！！」
「カルロス！！」
「分かってる！！　ブラボーチームに異常発生！！　全員上に戻るぞ！！」

『了解！！』

カルロスは自分が焦って飛び出さないよう自制しつつ、全員に指示を出してブラボーチームがいるはずの第３階層へと向かう。

後ろでまた殿を務めているダンとノルの２人はお互いに顔を見合わせ頷き合うと、ノルはＳＴＡＲＳ支給の無線とは別の無線機を取り出し、周囲の仲間にばれないよう小声でどこかへと通信を繋げる。

「（・・・ラインか？　いやさ、突入のタイミング早くできねえ？・・・ちょ、怒んなって！　こっちのメンバーが危ないんだよ！！　頼むって！！

・・・・悪い、助かる。・・・ああ、それじゃな。）」

「（・・・どうだ？）」

「（いいってさ。けど、時間は掛かるってよ。）」

「（今は少しでもできることをしておくしかない。）」

「（だな。）」

２人は話を終えると、険しい顔つきで先へと進んでいくカルロスたちの後を何事も無かったかのようについていった。

プロローグ・FILE4：アンノウン（正体不明）（後書き）

今回も本編に出てくるバイオハザードの専門用語についての説明です。

STARS（スターズ）

「Special（スペシャル） tactics（タクティクス） And（アンド） Rescue（レスキュー） Service（サービス）」の略で、意味は「特殊戦術及び救助部隊」。

元はラクーンシティ市警察に独自に設置された特殊工作部隊であり、市内で起きた凶悪犯罪に立ち向かっていた。

ラクーンシティで起きた最初のバイオハザード事件である「洋館事件」において隊員のほとんどが殉職。無事解決できたとき、部隊はたった5人しか生き残ることができなかった。

ラクーンシティ崩壊後は反アンブレラ組織へと変化し、日々アンブレラと闘い続けている。

B.O.W

「Bio（バイオ）・Organic（オーガニック）・Weapon（ウェポン）」の略。意味は有機生命体兵器。アンブレラによって作り出されたバイオモンスターの総称。

あくまでアンブレラによって任意に作り出された個体のことを指し、ウイルス流出により偶発的に生まれた個体には適用されない。

プロローグ・ＦＩＬＥ４：狩猟者の襲撃（前書き）

やっと・・・・やっと更新できたよ・・・！

プロローグ・ＦＩＬＥ４：狩猟者の襲撃

カルロスたちアルファチームがブラボーチームの異変を知り、合流しようとする少し前。ブラボーチームの３人は第３階層にてこの研究所で行われていたＴウイルスの実験データやＢ．Ｏ．Ｗの資料などの物的証拠を捜索していた。

その第３階層にある一室、研究員達のオフィスとなっていた部屋に２人の女性隊員がいた。片方は机に座り設置してあるパソコンに自分のＰＤＡを繋いで中の情報を調べている。もう１人は肩からＭ７９グレネードランチャーを掛け、ＵＺＩ（ウージー）９ミリサブマシンガンを両手で構えて油断無く周囲を警戒している。

「シェリー、どう？」

周囲を警戒している、背中に戦乙女（ワルキューレ）の絵が描かれているベストを着込んだポニーテールの女性隊員が、横目でＰＤＡの画面を見つつ尋ねる。

シェリーと呼ばれたのは長い金髪を同じくポニーテールにしている、恐らくは１０代後半と思われる少女だ。ドレスでも着込めばどこかの名家のお嬢様と間違われそうな可憐な容姿だが、たくさんのポケットのついたタクティカルベストと、太腿に仕舞われたハンドガン。そして腰に差してある大きな軍用ハチェットがそれを否定している。

シェリーはキーボードを打つ手を休めないまま残念そうに首を横に振る。

「このパソコンじゃ駄目。研究データなんかの重要書類はもっと下の階層にあるマザーコンピュータが一括管理しているみたいで、そこまで行かないと。」

「流石にそう簡単にはいかないか・・・。」

その後も少しパソコン内のデータを調べていたが、使用者の日記一つ入っておらず、ため息をつくとシェリーはパソコンからコードを抜いてＰＤＡをベストのポケットに仕舞い机から離れる。

「せめて何かのパスコードでも入っていたら良かったのに・・・。」

「そうそう上手く事は運ばないわよ。さ、レオンと合流しましょう。」

「了解クレア。」

シェリーはクレアと呼んだ女性隊員に笑顔とともに敬礼を返すと、机の置いておいた自分の銃であるＳＰＡＳ１５コンパーチブルショットガンを掴んでクレアと共に部屋から出て行った。

『こちらでは特に動きは見られんが、何か妙だ。恐らく奥で強力な妨害が来るぞ。』

「ああ・・・。俺もそう思う。最悪タイラントタイプとの交戦も考えないといけないな・・・。」

第３階層の待合室にて、分かれて証拠集めをしているシェリーとクレアを待っているレオンは、部屋にある椅子に腰掛けて念のために脱出用のヘリを警護しているチャーリーチーム隊長のバリーへと無線を入れていた。そちらで何かしらの出来事が無かったかの確認のためだ。

今の所ヘリの方に襲撃された様子は無いとのこと。レオンたちは

こちらの脱出手段を封じてくることぐらいはしてくると予想していたのだが・・・。

「カルロスたちにも聞いてみたが同意見だった。」
『やれやれ・・・。やはり簡単にはいかんか・・・。』
「今まで簡単に済んだことがあったか？」
『・・・・残念ながら思いだせんな。』

レオンが皮肉を込めて告げた言葉に、バリーは今までの捜査を思い出して苦笑を浮かべる。自分達の捜査が楽に終わったことなど、過去に一度として無いことをすぐに思い出したからだ。
だが、彼等の目に落胆や悲観は無い。その程度の危険はここにいる全員が覚悟していることだ。

『まぁ・・・、だからこそワシ等が戦わねばならんのだからな。』
「そうだな。」

２人は無線機越しにもかかわらず、相手と同じような微笑を浮かべる。その後、レオンが通信を終えると丁度シェリーとクレアが待合室へと入ってくる。

「どうだ？」

レオンが成果を尋ねるとクレアは肩をすくめて首を横に振り、シェリーはＰＤＡを出して報告をする。

「駄目ね。重要そうな情報にはロックが掛かってるって。」
「この施設の最下層に施設内全てのデータを管理してるマザーコンピュータがあるみたい。多分そのコンピュータからならデータを取り出せると思う。」

「何か使えそうなものは？」
「少し施設内について調べられたよ。第５階層まではそれほど重要は設備は無いみたい。ただ、それ以降の階層についてはセキュリティが固くて手が出せない。」
「それだけでも充分でしょ。後は行って調べればいいでしょうし。」
「ん。」
「それじゃ、他の皆が戻り次第俺達も先に・・・・。」

レオンが次の階層への移動を指示しようとしたとき、突然施設内全体に響き渡る大音量の警報が鳴り響く。

『！？』

いきなりの出来事に驚きつつもレオン、クレア、シェリーはすぐさま銃を構えて不意の襲撃に対応できるようにすると、世界最強のオートマチックハンドガンと名高いデザートイーグル５０ＡＥを構えたレオンを先頭に部屋の外へと出る。

「一体何よ！？」
「この警報・・・。恐らく最下層まで侵入者に入られたときの奥の手を出すつもりかだと思う・・・！！」
「ちょっと待って？まだカルロスたちって第４階層に入る筈なのになんで・・・。」
「分からん。確認してみよ・・・！？」

レオンが無線をカルロスに繋ごうとしたとき、近くで銃声と何かの生き物の声と思われる金切り声が聞こえてくる。

「どうやら歓迎のようだな！！　２人とも無線は！？」
「・・・駄目！　ジャミングされてる！！」

「私もよ！！　いつの間にかＥＣＭが発生してる！！」

シェリーとクレアはともに耳に無線機を当てて他の隊員に連絡を取ろうとするが、無線機から聞こえてくるのはノイズ音だけだ。どうやら通信は完全に妨害されてしまっているようで、レオンが思わず舌打ちする。

「チッ・・・！　シェリー、何とかジャミングを無効化出来ないか調べてくれ。」

「もうやってる。」

シェリーは急いで自分の無線機にＰＤＡのコードを繋ぐと、現在ジャミングしている電波の周波数を特定するべくＰＤＡの画面に表示されていく無数の文字を素早く調べていく。

レオンとクレアはシェリーが無線を回復させるまで迂闊に動かないことにしたらしく、それぞれ背中合わせになって襲撃を警戒する。

「何が来るのかしらね・・・。」

「先ほどの声からして＜ハンター＞だと思うが、もし＜タイラント＞タイプが来るとなると俺達じゃキツイな・・・。」

今まで倒してきたＢ．Ｏ．Ｗでこの場に現れそうなやつの名称を述べつつ、レオンは冷静に今の自分たちの戦力を分析していく。

シェリーは手が離せない状態、レオンはデザートイーグル５０ＡＥにサブアームのグロック１７、奥の手としてＲＰＧ－７対戦車榴弾砲が３本。クレアはＵＺＩにＭ７９、サブアームにブローニングＨＰ９ミリハンドガン。

一見かなり強力な装備に見えるが、＜タイラント＞タイプにはこれぐらいでは致命傷を与えにくい。逆に生半可なダメージを与えて暴走状態にしてしまう危険がある。

【カツ・・・カツ・・・・。】
「・・・来たわね・・・・。」

クレアが右手でＵＺＩを持ちつつ左手でいつでもＭ７９を撃てる様に準備していると、３人の耳に、何か軽くて固い物が床に当たっているような物音が飛び込んでくる。どうやら、その音はクレアの警戒している方向から聞こえてきているようだ。

レオンはシェリーにハンドシグナルでそのまま作業を続けているよう指示すると、クレアの横に並んで曲がり角から聞こえてくる物音――――恐らくはＢ．Ｏ．Ｗの足音だ――――――の主へといつでも発砲できるよう準備しておく。

【キシャァァァァ！！！！！】
「！？　しまった陽動か！！」

クレアがＵＺＩを、レオンがデザートイーグルを構えて通路の曲がり角へ注意を向けていると、突然後ろから先ほど聞こえてきたものと同じ甲高い金切り声が聞こえてくる。レオンが敵の狙いにすぐさま気づいて後ろを振り向くと、＜ハンター＞と思しきＢ．Ｏ．Ｗがシェリーへと襲い掛かり、振り下ろされた鉤爪をシェリーが片手側転で避けているところだった。

レオンはすぐさまイーグルを構えるともう一方の鉤爪でさらにシェリーへ攻撃しようとするハンターへ引き金を引く。

【ギィィィ！！】

５０ＡＥ弾を連続で食らったハンターは衝撃で後ろに吹き飛び、シェリーへと伸ばされていた鉤爪は空を切るだけに終わった。

「怪我は無いシェリー！？」
「大丈夫！　レオンのお陰！！」
「礼は後でな。」

通路の向こうから続々を現れ始めたハンターたちに銃撃を浴びせているクレアの心配を、危なげなく着地したシェリーが大声で吹き飛ばす。レオンは苦笑を返しながら油断なくたった今倒したハンターに重厚を向けている。

（おかしい・・・。わざわざ陽動までこなしたにしては手応えが無さ過ぎる。まるでわざと倒されたみたいに・・・。）

【ギシャァァァ！！！！】

レオンが不信感を募らせていると、それを裏付けるかのようにレオンが倒した筈のハンターが勢いよく起き上がる。その目には獲物を仕留める邪魔をしたレオンへの憎悪のようなものが浮かんでいるかのように血走っている。

（マグナムで致命傷になっていないのか・・・。普通のハンターじゃないな。）

内心の動揺を悟られぬよう無表情に徹しつつ、レオンは目の前のハンターを観察する。どうやらかなりの回復力を持っているらしく、既に胸部と腹部にある銃傷からの出血は止まっている。そして、レオンは何気無くハンターの肩に紫色のこぶがあることに気づく。
その瘤が一体何なのか、Ｂ．Ｏ．Ｗとの交戦経験がＳＴＡＲＳで１，２を争うレオンが即座に見抜いた。

「！？　こいつ、＜ネメシス＞が付けられてるのか！！」

B．O．Wの知能と自己治癒力を飛躍的に上げる紫色の寄生生物、＜ネメシス＞がハンターに取り付けられていることに気づき愕然とする。

すると、ネメシスを付けたハンターが突然レオンたちを指差し、それを合図にしたかのようにネメシスを付けたハンターの後ろから10体以上はいるかと思われるハンターの大群が現れ、すぐにレオンたちを取り囲んでしまった。

「・・・絶体絶命・・・ね。」

UZIのマガジンを交換しつつ、クレアが呆れたように呟く。一応彼女は何体かのハンターを仕留めたが、彼女が銃撃を食らわせたハンターにもネメシスの取り付いているハンターが混じっていたことと、あまりにも数が多すぎたためにハンターを倒すのではなく迎撃することしかできなかったのだ。

「シェリー、無線はどう？」

「まだ完全には直ってない。入れてもノイズしか届かないかも・・・。」

試しにレオンが無線を入れてみるが、無線機からはノイズ音以外何も聞こえない。思わずレオンは舌打ちする。

「・・・チッ。　ダメだ、ノイズしか聞こえない。仮に、カルロスたちが異常に気づいてこっちに向かっているとしてもこいつらがそれまで待ってくるとは思えないな・・・。」

弾数の減っているマガジンを交換しているレオンが険しい顔つきで無線の結果を述べる。結局、この状況は自分たちで切り抜けるし

かないようだ。
　周囲３６０度を囲まれている状況で、それでもなお彼等３人に諦めは見られなかった。それぞれが銃を手に、不屈の闘志が宿っているエメラルドの瞳でハンターたちを睨んでいる。

「全く、たまには楽に終わって欲しいんだけどね・・・。」
「こいつらに言え。もっとも、聞き入れてくれるとは思えないがな。」
「知能が上がってるから案外・・・。」
「無いだろう。」「無いでしょ。」

　クレアのため息交じりの愚痴に真面目に答えたシェリーが２人に突っ込まれ、頬を膨らませたりしている。このような状況でなければ一部の人種の方々に『萌え～！！』などと叫ばれそうな可愛い仕草だが、生憎今は周囲をハンターに囲まれているのだ。　場違いなことこの上ない。

【ギィィィアァァァ！！！】
【ギシャアアアアアア！！！】

　３人が自分達を無視して暢気に話していることにイラついたのか、ハンターたちが一斉に騒ぎ出す。だが、そんなことに臆するような人間が、こんなところにいるはずもない。

「やれやれ・・・、声だけはご立派なようだ。」
「いつものことでしょ。　さっさと片付けちゃいましょ。」
「賛成。」

　レオンたちはハンターたちの憤慨など全く気にせず、“何度も聞いてきた為に飽きている”とでも言うように呆れを含んだ表情をし

た。そして、それぞれ自分の銃を構えてハンターたちへ向き直る。
レオンとクレアが並んで立ち、その後ろをシェリーが1人でカバーする。　シェリーについて何も知らない人が見れば、首を傾げる配置だろう。これでは、まだ10代後半と思われる年齢の少女が1人で闘うことになってしまう。
だが、レオンとクレアはシェリーに対して心配は欠片もしていなかった。何故なら、ここにいるSTARSメンバーの中で、シェリーこそがトップクラスの実力を持っていることをレオンたちは知っているからだ。
シェリーはいつでも飛びかかれる体勢のままじっとしているハンターたちに油断無く視線を回すと、腰のハチェットをすらりと引き抜いた。ギラリと鈍く光る刃に何匹かのハンターが怯む。それを見て、シェリーが微笑を浮かべる。
その笑みは可憐さの中に濃密な殺気を滲ませていて、さながら戦場(いくさば)へと向かう戦乙女(ヴァルキリー)と見紛(みまが)う雰囲気を漂わせていた。

「・・・来なさい。　今日があなたたちの命日よ。」

シェリーの挑発じみた言葉に機嫌を損ねたのか、シェリーに近かった何匹かのハンターが金切り声とともに飛び掛っていく。
こうして、ブラボーチーム3名とハンターの群れとの死闘の幕が切って落とされた・・・・。

レオンたちがハンターの群れとの戦闘に突入した頃、研究所の奥深くの第7階層でもハンターとの交戦を行っている人物がいた。
いや、これは交戦とは呼ぶことは出来ないだろう。　これは『虐殺』と呼ぶしかないほどに一方的過ぎる戦闘となっていた。

【キシャァァァァ！！！】

2体のハンターが金切り声を上げつつ自慢の瞬発力で一気に間合いを詰めていく。その先には、コート・ベスト・ズボン・サングラスにいたるまでの全ての衣類を漆黒に染め上げている金髪の青年が佇んでいる。その左手にはから銃口から硝煙が立ち昇っているデザートイーグルが握られており、もう片方の手は素手のままだ。
2体のハンターは時折左右入れ替わりつつ青年へと突撃してき、2メートルほどの距離になると縦に一直線に並ぶと、後ろにいた方のハンターがジャンプした。どうやら上下に分かれて青年を仕留めるつもりらしい。　普通の人間ならばハンターが駆け寄ってくる前に横に転がるか何かして回避するだろうが、青年は全く逆のことを行った。
何と、幾多の人間の血を吸い取って来た死神（デスサイズ）の鎌のごとき爪を持つハンター達に、自分から突っ込んでいったのだ。
近接戦闘が唯一の攻撃手段であるハンターと至近距離で闘うことは自殺行為でしかない。・・・・・・青年が生身の人間であったならば。
青年は数歩前に踏み出してから、両手の爪を振り上げたまま落下

途中のハンター目掛けてジャンプする。まるで大砲の発射音のような踏み込みの音とともに鉄筋コンクリートの床には青年の足跡がくっきりと残され、青年はまさしく砲弾のような速度で空中へと躍り出た。

【ギギャァ！？】

これにはハンターも驚いたらしく、思わず出た金切り声の声色にはこちらへ向かってくる青年への隠しきれない動揺が滲み出ていた。

それにより、僅かに隙が出来る。

「ほいっと。」

青年はハンターに突っ込んでいくと、速度を落とすことなくハンターの顔面目掛けて手刀による突きを繰り出す。青年の手刀は半開きの状態だったハンターの口をこじ開けて口腔内へと侵入し、そのまま脳まで到達。

この時点でハンターは声一つ上げることもできずに絶命しているが、それでも突きの威力を殺しきれず、指が第一関節まで頭蓋骨を貫通してしまいハンターの後頭部から大脳新皮質と頭蓋骨の破片とともに突き出てきてしまった。

未だ空中にいる青年はこのままでは右手を抜けないことに気づくと、左手のデザートイーグルを床で方向転換し終えたところのもう一匹のハンターへ向け発砲した。

５０ＡＥ弾特有の腹に響く銃声が２回続けて響くと、床にいたハンターの胸部に２発の銃弾だ叩き込まれ、ハンターは血を撒き散らしながら後ろに倒れる。

青年はデザートイーグルを放つと同時に銃の反動を利用して体を横に回転させると、ぴくりとも動かなくなったハンターの死体から引き抜く。右手は意外にも簡単に抜けたが、その手は手首の辺りか

らハンターの血で真っ赤に染まっており、青年の体が回転していることも重なって空中に見事な紅い螺旋状の軌跡を描いていた。
空中にあったハンターの死体が血を流しつつ落下すると、青年はその近くに軽やかな着地を決める。　そして、血塗れの右手を見て表情を歪めた。それはもう嫌そうに。

「うわーきったねぇ！　止めときゃ良かったー！！　落ちねー！！」

余程耐え難いのか、手を振って血を振り払おうとする青年の姿はどこにでもいる若者にしか見えず、たった今素手でB．O．Wを殺害した人物とは思えない。　というか、そんなに嫌なら止めておけばいいのに。

「畜生取れん・・・・。　仕方ない、どっかに水道ないか探しに行く・・・・。」

しばらく右手を勢い良く振ったり壁に擦り付けたりして血を拭おうとしていたが、かなりしつこくこびりついているため水で洗い流さないと駄目らしい。がっくりと肩を落としながらその場を離れようとする。
だが、そう上手くはいかないらしい。

「アララ・・・。　いつの間にやら団体さんがまた来てらっしゃる。」

そう、青年の周囲には再びハンターの群れが集っていたのだ。恐らくは先ほどよりも多くの個体数だろう。　床に転がって物言わぬ死体になっている仲間の姿に興奮しているのか、青年に向けてしきりと威嚇の声を上げている。
だが、それだけの数に囲まれようとも、青年は全く慌てることは

なかった。とても面倒くさそうに瞼を半開きにさせただけだ。　だが、たったそれだけの動作の間に青年の纏う空気が鋭くなっていくことにハンターたちは気づいていた。

「・・・やれやれ。　あまり時間掛けるのもなんだし、ちゃっちゃと済ますか。」

その言葉を言い終えると共に、青年の体から強大な圧力（プレッシャー）が放たれる。それは、周囲で興奮状態だったハンターたちを一瞬で黙らせてしまうほどの強力なシロモノだった。

あまりに強いプレッシャーにじりじりと後退していくハンターたちに、青年は始めて笑みを浮かべる。　見た者の背筋が凍ってしまうような、殺気を十二分に含んだ笑みで。

その笑みを見たハンターたちは、弾かれたように一斉に青年へと襲い掛かっていく。　狩猟者の本能ではなく、生き物としての原始的な本能――――恐怖によって。

自分目掛けて襲い掛かってくる無数のハンターたちを見据えながら、青年は左手のデザートイーグルの銃口を正面に向け、腰からもう一丁別のハンドガンを抜き放つ。

軍用のＭ９２ＦＳをベースに改造された銃らしく、銃身延長パーツと２０発マガジンが取り付けられており、銃身の右側には漢字で『断罪』という文字が刻まれている。かつて、とある少年がラクーンシティから脱出を果たしたときに所持していたカスタムハンドガンの２代目である。

青年――――――数少ないラクーンからの脱出者であり、Ｇウイルス保持者。そして日本国内にて『何でも屋』を行っている唯一の人物、平山健（ひらやまけん）は、左手のデザートイーグルと右手のＭ９２ＦＳカスタム『断罪』を正面に構える。

「安心しろ。　一匹残らず狩ってやるぜ。」

悪ガキのような笑みのまま放たれた言葉は、同時に響いた発砲音にかき消されて本人以外に聞こえることはなかった。

人外の青年は血飛沫を纏いて修羅の道を突き進む。　正義を背負う戦士たちは硝煙を纏いて世界に散らばる悪を打ち砕く。
その道は未だに交差せず平行線。　だがその先には運命の交差路が待っている。

プロローグ・ＦＩＬＥ４：狩猟者の襲撃（後書き）

レイン：あー今回からアタシらがバイオハザード用語集を担当することになったぞ。
ケイト：私達まだ出番ないからね・・・。
ニーナ：ラインはいないのだな。
麻衣：あの子は次回に出番があるって。
レインとケイト：・・・。
ニーナ：ふ、２人とも落ち着くのだ！　ライフルを持ってどこに行くつもりなのだ！？
麻衣：・・・えーと、それじゃ今回の用語集始めまーす。

ハンター

Ｔウイルスを利用して作られたＢ．Ｏ．Ｗの一種。成人男性にＴウイルスを注入して体を変異させ、遺伝子改造を施すことによって緑色の肌を持つゴリラのような生き物になる。
元が人間であるためかある程度の知能を有し、簡単な命令なら遂行することができ、集団戦法を行うことも。
機動力と群れでの連携力を高めた『ハンターβ』や、両生類の遺伝子を組み込んだ『ハンターγ』などの改良種も存在する。健やＳＴＡＲＳが闘っているのは初期型の『ハンターα』。

レイン：今回これだけなのか？
ケイト：作者が何を書こうか思いつかないんだって。ニーナ：裏話やキャラの設定でも話せばいいのではないか？　健が日本にいる間どれだけ暴れていたかとか・・・。
麻衣：それはもう少し話が進んでから掻くつもりだそうよ。
レイン：・・・じゃあ何か？　アタシらの出番はもう終わりなのか？

ケイト：そうみたい・・・。

ニーナ：・・・帰って飲もう。　浴びる様に飲もう・・・！

麻衣：私も付き合うわ・・・。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9637e/

ＢＩＯＨＡＺＡＲＤ　ＤＥＡＤＬＩＮＥ　ＮＥＸＴＳＴＡＧＥ

2010年10月8日12時41分発行